

中央アジア旅行記

木村敏雄（地質）

5月31日から3日間のモスクワでの「オフィオライト討論会」が終ったあと、6月2日の夜に休む暇もなく飛行機に乗り、かつてのシルクロードに沿う小都市フェルガナに向った。オフィオライトはかつての海洋地殻であったと考えられ始めている。オフィオライトと一口に言われるものは、実はいろいろの岩石の集りで、その産状も多様である。確にかつて海洋地殻であったと思われるものが、地中海のキプロス島などでみつまっている。しかし別の出来方をしたものも多いらしい。現地ですべて実際に産状を見ることなしに、お互のイメージが違うままで討論したのでは議論がすれ違うので、このような現地討論会が開かれるわけである。6月13日までの強行軍で、南天山山脈およびその西方延長部のオフィオライトを見学し、さらに西に飛んで小コーカサスのオフィオライトを見ようというのである。総勢は外国人約50名、ソ連人約100名である。

三日間の討論会のあとで、しかも夜行ということで、さすがに一同は疲れていた。しかし飛行場に降り立ったわれわれを、フェルガナのお嬢さん達が花束を持って迎えてくれたのに一同歓声をあげた。お嬢さん方の縦模様の原色の服と長く垂らしたおさげの髪が印象的であっ

た。花束は各自が自分のを束ねたものか、花の種類も束ね方もまちまちで、その素ぼくさが嬉しかった。その後も各地でこのような花束の歓迎を受けた。アゼルバイジャンのお嬢さん方には目の大きい、明るい美人が多かった。

一般旅行者は行くことができない遠くまで行くので、バスには常にパトカーの先導がつく。われわれを保護するためのものであって、監視するためのものではなかったようである。パトカー近くを走ったときなど、行き交う車が比較的多いところでは、その車を止めてわれわれのバスは進む。このような大名行列をしたことのない一同は、向うから来る車が道の傍に停止する毎に大声をあげて喜ぶ。

オフィオライトの見学と討論はまことに有益であった。しかし此処でのオフィオライトが海洋地殻であったかどうかの結論は得られなかった。これから先も各国で研究を進めなければならない、むずかしいしかし重要な問題であるというのが一同の感想であった。キジルクム沙漠の中のタムジタウの山中で、海洋地殻が大陸地殻の上に乗っかるときにできたという大デッケン構造を一望のもとに見たときには、自然の壮大さをしみじみ感じ

た。

私にとってなじみの薄い乾燥地域の地形を見ることができたのも大きな収穫であった。雨の少いフェルガナ地方では、南天山山脈のわずかの雨を集めて山麓に流れ出る水を利用して盆地は沃野となっている。しかし天山の前山地帯はまるで沙漠である。この半沙漠をすぐ南にひかえながら、街には一かかえもある鈴かけの並木が青々としている。街路樹の列の根元には溝が掘られ水が流されている。道の真中に影を落とすほどの街路樹はこの地域の長い歴史を示している。サマルカンドでは早朝にモスクの前庭のバラに重いバケツの水を運ぶ 10 才ぐらいの少年を見た。半沙漠地の緑はここに住む人達の憩いであるが、それはこのようにして守られている。

サマルカンド、ブハラ、ヒーバなどの古都市はゼラフシャン河またはアムダリア河といった大河によってうるおっている。サマルカンドからヒーバの北東にあるウルゲンチまで飛行機で飛ぶと、ゼラフシャン河周辺の広い沃地は北西に向って狭くなる。やがてその支流の上を飛ぶ。ここでは耕地は川の両側の猫の額ほどのはんに止

まる。やがて潤れた川のメアンダーが続き、これも砂丘に埋もれる。やがて地平線に黒い一すじの帯が見えてくる。アムダリア河である。アムダリア河ではほとんどその右岸にまで砂丘の列がせまり、砂丘と河との間にわずかの人家が散見される。これに対して左岸にはアムダリアの濁流をとり入れた運河がいくつか走り、広大な沃野を作っている。始めは褐色に濁った水も、運河の中ではやがて澄んで、青いすじとして平野の中に消える。かんがいが重要な此処では畑は水田のようにあぜで区切られている。一枚の“田”の中にも狭い溝が平行にいくすじも掘られている。飛行機の上で水田と見えたものは、実はこのように作られた綿畑であった。

この綿畑がずっと続いたあとに着いたヒーバには、日干しの泥れんがの城壁に囲まれた小都市が残されている。華麗なタイル張りのいくつかのモスクの他に、多数の小さい、四角い泥作りの小屋の白壁が続く。数百年前そのままの小都市である。私はこの旅行で、東洋と西洋とのかつての接点であったこの地域で、もっと古い時代の大洋地殻と大陸地殻との出会いを見たわけである。